

総括研究報告書

主任研究者 水野正彦

本研究の目的は妊娠分娩経過における母体及び胎児或いはその延長としての新生児の健康と安全の確保にある。そのためには母児に与える種々の内的外的環境因子を分析し、それより得られた成績に基き、より発展した産科管理の臨床指針の確立を図ることが必要である。本研究班では上記目的を達成するために以下の4つの重要課題を取り上げ、研究を進めているが初年度の研究成果は以下の如くである。

I. 諸因子の胎児に及ぼす影響に関する研究（分担研究者・一條元彦）

(1) 周産期感染症に関する研究

- a) 早産児の免疫能は、好中球貪食能、殺菌能、血中 clg, C₄, C₃, NK 活性, IgM 産生能, IL-1 及び IL-2 産生能はいずれも低値であり感染防御能力は未熟であることを示した。
- b) ヘルペスの胎内感染を知るために新生児血中の IgM 分画の抗体の検出が有力であった。
- c) 前期破水の細菌を分析した。また妊婦 183 例中 8 例 (4.4%), 新生児 95 例中 4 例にクラミジアが検出された。

(2) 各種薬剤の児に及ぼす影響に関する研究

- a) 全国 23 施設 2231 例の妊婦を対象に使用薬剤を検討した結果、鉄剤、子宮収縮抑制剤の使用頻度が高かった。
- b) 糖尿病合併妊娠 512 例中 21 例 (4.1%) に頭部や心、循環器系などの奇形が認められた。
- c) 妊娠中毒症は約 10% にみられ、hydralazine や α -交感神経作御阻止剤などが汎用されていた。

(3) 嗜好品等の児に及ぼす影響に関する研究

- a) 妊婦の受動喫煙 (P・S) による妊婦血中のコチニン濃度の上昇は非喫煙群対照の約 18 倍と著明に高く、その胎児臍血中のコチニン濃度も非喫煙群対照の約 2 倍であった。また P・S 妊婦の新生児の 24 時間尿中のコチニン濃度も高値を示した。
- b) P・S 妊婦の児は発育障害を受け、低体重児が出生した。

II. ハイリスク胎児の産科管理に関する研究（分担研究者・八神喜昭）

(1) 反復流産の疫学的研究

- a) 反復流産症例中不育症の頻度は 36.5% であった。

(2) 反復流産の治療に関する研究

- a) 免疫療法を施行された 280 症例を調査し、治療成績は比較的良好であり、且つ著明な副作用もないことが判明した。

(3) ハイリスク胎児の治療法開発に関する研究

- a) 出生前診断及び胎児治療についての現状調査を施行した結果多くの施設で関心が高く、実施されつつあることが明らかとなった。

Ⅲ. 乳汁分泌確立に及ぼす母体・環境因子の影響に関する研究（分担研究者・水野正彦）

(1) 産科的諸因子と母乳分泌に関する研究

- a) 産褥早期と産褥1～2ヶ月の時点での乳汁分泌状態の相関性が高いことを示し、産褥早期に良好な乳汁分泌を得ることの重要性を確認した。
- b) Prolactinの分泌と乳汁量とはProlactinの病的分泌を伴う疾患を除いては、一定の関係がみられなかった。
- c) 母乳に影響を及ぼす各種因子を抽出し、母乳調査用紙を作成した。

(2) 内分泌疾患と母乳分泌の関連に関する研究

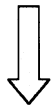
- a) PRLの分泌異常のある疾患と乳汁分泌との関連をみたが、特に手術を受けた下垂体腺腫例では妊娠産褥期のPRL値が低く、乳汁分泌も一般に不良であった。従って産褥期の乳汁分泌よりみると、Prolactinomaの治療法として手術療法よりは、薬物療法の方が優っていた。

(3) 新生児因子と母乳分泌の関連に関する研究

- a) 新生児因子と母乳分泌との関連をみる目的で新生児に関する広範な項目を網羅した調査表を作成した。

Ⅳ. 妊産婦死亡防止対策樹立に関する研究（分担研究者・本多洋）

- a) 妊産婦死亡症例を把握するために日母全国支部組織を通じ調査を徹底させた。
- b) 全国支部調査担当者連絡会を開催し、情報交換と調査法の統一化を図った。
- c) 調査資料の個別的検討を行うために症例要約表のモデルを作成した。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



総括研究報告書

主任研究者 水野正彦

本研究の目的は妊娠分娩経過における母体及び胎児或いはその延長としての新生児の健康と安全の確保にある。そのためには母児に与える種々の内的外的環境因子を分析し、それより得られた成績に基き、より発展した産科管理の臨床指針の確立を図ることが必要である。本研究班では上記目的を達成するために以下の 4 つの重要課題を取り上げ、研究を進めているが初年度の研究成果は以下の如くである。

・ 諸因子の胎児に及ぼす影響に関する研究(分担研究者・一條元彦)

(1) 周産期感染症に関する研究

- a) 早産児の免疫能は、好中球貪食能、殺菌能、血中 cIg, C4, C3, NK 活性, IgM 産生能, IL-1 及び IL-2 産生能はいずれも低値であり感染防御能力は未熟であることを示した。
- b) ヘルペスの胎内感染を知るために新生児血中の IgM 分画の抗体の検出が有力であった。
- c) 前期破水の細菌を分析した。また妊婦 183 例中 8 例(4.4%), 新生児 95 例中 4 例にクラミジアが検出された。

(2) 各種薬剤の児に及ぼす影響に関する研究

- a) 全国 23 施設 2231 例の妊婦を対象に使用薬剤を検討した結果、鉄剤、子宮収縮抑制剤の使用頻度が高かった。
- b) 糖尿病合併妊娠 512 例中 21 例(4.1%)に頭部や心、循環器系などの奇形が認められた。
- c) 妊娠中毒症は約 10%にみられ、hydralazine や 一交感神経作御阻止剤などが汎用されていた。

(3) 嗜好品等の児に及ぼす影響に関する研究

- a) 妊婦の受動喫煙(P・S)による妊婦血中のコチニン濃度の上昇は非喫煙群対照の約 18 倍と著明に高く、その胎児臍血中のコチニン濃度も非喫煙群対照の約 2 倍であった。また P・S 妊婦の新生児の 24 時間尿中のコチニン濃度も高値を示した。
- b) P・S 妊婦の児は发育障害を受け、低体重児が出生した。

・ ハイリスク胎児の産科管理に関する研究(分担研究者・八神喜昭)

(1) 反復流産の疫学的研究

- a) 反復流産症例中不育症の頻度は 36.5%であった。

(2) 反復流産の治療に関する研究

- a) 免疫療法を施行された 280 症例を調査し、治療成績は比較的良好であり、且つ著明な副作用

a) 出生前診断及び胎児治療についての現状調査を施行した結果多くの施設で関心が高く、実施されつつあることが明らかとなった。

・ 乳汁分泌確立に及ぼす母体・環境因子の影響に関する研究(分担研究者・水野正彦)

(1)産科的諸因子と母乳分泌に関する研究

a)産褥早期と産褥1~2ヶ月の時点での乳汁分泌状態の相関性が高いことを示し、産褥早期に良好な乳汁分泌を得ることの重要性を確認した。

b)Prolactinの分泌と乳汁量とはProlactinの病的分泌を伴う疾患を除いては、一定の関係がみられなかった。

c)母乳に影響を及ぼす各種因子を抽出し、母乳調査用紙を作成した。

(2)内分泌疾患と母乳分泌の関連に関する研究

a)PRLの分泌異常のある疾患と乳汁分泌との関連をみたが、特に手術を受けた下垂体腺腫例では妊娠産褥期のPRL値が低く、乳汁分泌も一般に不良であった。従って産褥期の乳汁分泌よりみると、Prolactinomaの治療法として手術療法よりは、薬物療法の方が優っていた。

(3)新生児因子と母乳分泌の関連に関する研究

a)新生児因子と母乳分泌との関連をみる目的で新生児に関する広範な項目を網羅した調査表を作成した。

・ 妊産婦死亡防止対策樹立に関する研究(分担研究者・本多洋)

a)妊産婦死亡症例を把握するために日母全国支部組織を通じ調査を徹底させた。

b)全国支部調査担当者連絡会を開催し、情報交換と調査法の統一化を図った。

c)調査資料の個別的検討を行うために症例要約表のモデルを作成した。